
目玉焼き売り

守水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目玉焼き売り

【Nコード】

N7889P

【作者名】

守水

【あらすじ】

お祭の出店に並んだ、一風変わった屋台の話。

「……『目玉焼き売り』？ 変な屋台ね、目玉焼き売ってんの？」

「いや、それはないだろ」

由紀の考えは、まあ誰でも最初に思いつくもんだらう。実際俺も思った。でも人だからできています。並んでるわけではなく、ただ見物しているだけのようだ。ただでさえ込み合う狭い通路が、よい通りにくくなっている。

「でもさ、なんかおもしろいのやってるみたいだよ。見に行かない？」

「いいぜ」

何かパフォーマンスが終わったのか、少し人が減っていった。ここぞとばかりに隙間を見つけ、うまく一番前に行くことができた。

「はい、目玉焼き売りのパフォーマンス、始めるよー！ 見てない人は見ていきな！ ほかじゃ見られない珍しいもんだよ！ 見た人も継続視聴料はとれないからどーぞどーぞ！」

屋台のイメージのおじさんより、結構若い感じの男だった。鉄板ものらしく、吹き上げてくる熱風に、由紀が手で小さく顔を仰いだ。「さっ、パフォーマンス目玉焼き！ これがホントの目玉焼きだよ！」

男はさと自分の左手を掲げた。何か握っているようだが、中までは見えない。指に力が込められると、男は左手を鉄板の上に差し出した。そこから、透明な液体が落ちる。液体というよりはゼリー状に近かった。

それは真っ黒な鉄板に落ちると、ちょうど目玉焼きを焼いたときみたいがいい音がした。

「仕上げはこれだ」

握っていたものの一部を足元に投げ捨て、残ったものを焼けるゼリー状の物体の上に乗せ、押し込んだ。由紀が押し殺したようにう

めき声をあげた。俺は心の中であげていた。

「これぞ本物！ 目玉焼きだ！ ちなみにこれは牛のもんだから心配なく」

卵の黄身に当たる部分には、屋台の薄い布屋根をうつろに見上げる、黒目が開いていた。水分が蒸発したのか、最初に垂らされた白身部分は固まり始め、異形の目玉焼きが出来上がった。

「これはもちろん食べもんじゃないからね！ はいっ、そんなところで俺の自信作、買って行かない？」

フライ返しで手早く掬い取って、本物目玉焼きは皿に移された。当然だが、ここで帰っていく客のほうが多い。残ってるのは興味が湧いた、俺らと同じくらいの若者だけだ。一体この変な男の自信作とは何なのかと。

「はい、名づけて目玉串！ ほとんどの中身はお餅だけど、運のいい人には目玉入り！」

「目玉あ？ まさかさつきみたいに牛のとか……」
見上げてくる由紀の表情から見るに、本気でビビっている。俺もそうだ。そんなもん入ってて、食っちゃったら腹壊すぞ。

男は鉄板の上に、ころものついたダンゴみたいな物を並べ始めた。どうやらその丸いのは餅らしいが、男いわく目玉かもしれないって言うんだから、とんでもないロシアンレットだ。

「さあさあ、買う人は？ ああ、目玉は牛じゃなくて魚だよ。魚の目はDHA豊富だって言うだろ？ 体にいいぞ！」

なるほど。そういや一時期話題になったことがあった。安心したのか、若いやつらが買い始めた。

「まいどっ！ 味付けはうすーい醤油だからな」

「一本百円みただけ……。あたしパス。マサは食べる？」

「んー……」

俺食ってるやつらを観察した。ほとんどは全部ダンゴで助かっているようだ。

「うわ！ これもしかして目玉？」

一人が騒いだ。異物感に、わざわざ吐き出したらしい。そいつの友達が、手の上の物を凝視している。

「おつ、兄ちゃん大当たり！ さあさ、食いな！ 大当たりっつーことで一本オマケしてやる。がんばって食え！」

また多く貰ったそいつは、ダンゴで紛らわして目玉を食うらしい。よくやるぜ。

「でも、大体はダンゴみたいだし……。由紀、俺一本買ってみるよ」

「マサってばチャレンジだなー」

たいして列もできていなかったなので、すぐに買うことができた。ころも付きの餅もなかなかうまい。三個目を歯で串から引き抜く。噛んだ途端、口が動きを止めた。

「ん？ どしたのマサ」

「……」

無言で口に手をあて、中身を吐き出した。

「ちょ、なに戻してんのよ！」

入れたばかりだったからそんなにぐちゃぐちゃにはなっていない。由紀もおかしいと思ったのか、そろそろと俺の手を覗き込んだ。ころもを取って、その中身を見る。

「これ……目玉？ 当たっちゃったの？ マサ」

「っばいな。でも、さっきのやつが持ってたのより随分形がいいけど……」

きれいな球形だったのだろうか、ゆがんでるのは俺が噛んだせいだ。さっきのやつと同じく、俺も屋台の男に確認することにした。下手したらこの男、間違えてさっきの牛の目玉を串にしたのかも知れない。

「あの……これ、魚のですか？ なんかさっきの牛っばいんですけど……」

男は少し驚いた風に、俺の手の中のものを見つめた。男の大きい、まるでくじの一等賞を当てた子供を喜ぶような声は、しばらくして

から響いた。

「兄ちゃん、超大当たり！ 今回一個しか入れてない人間の目玉だよ！ ああ、ちゃんと消毒してあるし、火も通したから腹は壊さないぞ。さ、どうする？ 食うか？」

(後書き)

お題「目玉」で書いた作品。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7889p/>

目玉焼き売り

2011年10月8日13時55分発行